
神の力を持つ女

人从蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の力を持つ女

【Nコード】

N9640K

【作者名】

人从蛙

【あらすじ】

つまらない世界。私は嫌いです。だから神様が力をくれました。

私はつまらない世界を肅正するため、脳内で叫ぶ。

『死んでしまえー！』

私はピアノシモメンソールの煙草をふかし、噴水広場で一人空を見上げていた。風がやたら強くて、煙草の火がボウと燃え上がる。仕事終わりの一服は、いつもながら最高だった。私の唯一の至福の時間：

私は上家正子^{じょうかまこ}。今年で29。三十路一步手前。独身。恋人はいない。大手企業に勤めるOL。それなりに稼げていて、貧乏でなければ金持ちでもない。自宅から通勤している分生活には全然困っていない。あと、こんな年齢しているのに結婚願望どころか、恋人なんかもどうでもいいと思っている。他人に言われた事はないが、私は周りからきつと冷めた女だと思われるだろう。正直、それに関してもどうでもいいので放置している。

そんな私が常に感じ、思う事はただ一つ。

世界がつまらなすぎて、非常に残念という事だ。

今、世間では不況だとかどうたら騒いでるけど、私にやあ関係ないし、興味ない。充分に稼げているし。それにそんなの、働けない人間の言い訳のようにも聞こえる。現に世の中には腐るほど仕事あるし、要は選ばなきゃいいって事だ。年齢なんかも五体満足で動けば全然関係ないだろうし。なにかも嫌になったら、ホームレスにでも仏にでもなりゃいいし。まあただ単に、そんなニュースごときでは私の刺激にはならないという事だ。ミソツカスな世の中め。知らない芸能人が入籍したぐらいどうでもいい。

はあ、どうせなら「どつかの国からミサイル飛んできて日本消滅う」みたいな出来事のが面白いっつ。

私はフィルターぎりぎりまで吸った煙草を地面に押し付けて消し、ベンチから立ち上がる。腕時計を見ると時刻は6時5分前。相変わらず、風は強い。春なのに少し寒いぐらいだ。噴水の周りには円を描くように4つベンチが並んでいる。私からみて右側のベンチにはイチヤつくカップル、その横に立ちながら取引先に電話してるリーマンのオヤジ、私から左側のベンチにはいかにも「悪」って感じのチャラ男。あー、うぜえ。うぜえうぜえうぜえ。つまらない世界のつまらない産物どもめ。てめーらみたいな存在が余計に目立つから世界が面白くねーんだよ？カスが。私はなんだかイライラしてきたので、頭の中でこう叫んでやった。

『全員：死んでしまえー！』

それと同時に今日1番の強風が吹いた。まるで私から風が出たように感じた。

まるで低レベルな事してるな、私。中二病か：っと自分を皮肉って、その場を離れようとした。

次の瞬間、リーマンが「うぐぐぐぐ」と言いながら苦しみ始める。隣にいたカップルの男が「大丈夫ですか？」っと心配しリーマンに近寄る。苦しむリーマンは目や口、鼻、耳から血を流し始める。そして「ぶはあ！」っと大量の血を撒き散らすと、その場に倒れてピクリとも動かなくなってしまった。カップルの女が「きゃー！」と叫び、辺りは騒然とする。

…え？なに？なんでいきなり死んだの？私が「死んでしまえー！」とか念じたから？いやいやいや、違う違う違う。私はなにも悪くないよ。神様じゃあるまいし。

「う…な、なんだ？胃が…痛い」

次にリーマンに駆け寄ったカップル男が苦しみ出す。「良助、どうしたの！？」

カップル女が男に駆け寄ったが、「う…い、痛い」と言い女も苦しみ始める。「な、なんだよ！どうなってん…ぐう」とチャラ男も苦しみ始める。彼らはリーマンと同じく色々な所から血を吹き出し「ぶはぁ！」っと血を撒き散らすと同時に倒れこんだ。カップル女は目から大量に血を出しすぎたのか、目玉が若干飛び出していた。他にも被害は増し、散歩していた婆さんとその犬、ランニングしてたオッサン、ヤマンバギヤル2匹…全員リーマンのように血を吐き倒れた。私はその場で立ちすくみ、「まさか、次は私！？」っと思ったがなんともなかった。

何故、私だけ無事なの？

…とりあえず事件だし、一応携帯電話で警察に連絡した。コレは…まさか私のせいなのか？確かに、会社終りで疲れてるのにイチャつくカップルを目にしてムカつきました。リーマンのオヤジがなんかみすばらしかったのでムカつきました。チャラ男は存在だけでウザいと思いました。その他、色々と思いました。んで「死ね」と思ったら殺せた。嘘、マジでか。まるで神じゃん、私。凄くね？久しぶりにちよっとワクワクしちゃうじゃない。不謹慎だけど。人死んだけど。私は私がおそらく成し遂げたであろう、私の力に興奮し、私が見ながら警察を待った。

：警察は中々来ない。何してるんだ。噴水周返には血の湖化して
たので、案の定、人がぞろぞろと群がってきた。はいはい、これも
つまらない物ですよー。他人の不幸を自分の刺激にしようとする
不粹者達め。（私が言えたぎりじゃないがね）。全くもってクソだ。
いや、糞以下。こんな奴らには：天罰じゃー。

私はあろう事か、暇つぶしのために、『さっきのは私が死を念じた
ことによって起きた事なのか』、それとも『たまたま偶然に起こっ
た事なのか』を確かめるべく、その野次馬向かって

『死んでしまえー！』

っと念じてしまった。びゅうつと強風。すると手前で見物していた
若者の一人が「うぐぐぐ」と言いながら苦しみ始める。

：同じ展開で面倒臭いからハシヨらせていただく。

野次馬の人達は次々と倒れ、その場で生きてるのは私だけだった。
ざっと数えて62人は死んだな。老若男女関係なく。私に神の力が
あること確定。すごいな私。スーパージャン。やっぱ神様じゃ
ん。ふふふ、これなら人類滅亡とかも出来んじゃないかしら。

私はざっと出来た死体の山を見る。

：アレ？なんだろうか、この虚しさは。渴いた心に追い打ちをかけ
る、虚しさ虚しさ虚しさ。周りにあるのは無惨な死体達のみ。私一
人で舞い上がってるこの状況。

究極に虚しい。

神的な能力を持ってるからって何？なんにも変わらないじゃん、世界。こんなん、世界中の所々では頻繁に起こってるじゃん。てか普通じゃん。

なんだか、急に私は頭にきた。テロリストの思想とか、戦争を目論むバカ共とか、暴力でしか自分の存在を表せないヤンキー、平気で自分の子供殺す親とかに。最終的にさ、こんな事しても残るのは虚しさだけ。破壊衝動に、得なんて全くない。なんで人は人を壊す？誰のため？自分のため？未来のため？自分の感情を虚しさで満たすため？なんにもスツキリしないよ。こんなの。やっというてなんだけど。モヤモヤするだけ。余計につまらないよ。ふざけんなよ。それにちっとも世界が変わった気がしねーよ。なにが神だ。むしろ神が死ね。私が死ね。死ね死ね死ね死ね死ね…！

私は最期の力を、なんとなくで振り絞り、頭の中で叫んだ。

『私よ、死んでしまえー！』

…………あら？

なんともない。さっぱり元気。あれ？疑問だらけ。もう一度神の力を使おうとした私に、誰かが後ろから声をかける。

「君！大丈夫か！？」

気がつくど、警察と機動隊が現場に出動していた。そりゃ、こんなに死んだら機動隊も来るわな。私は声をかけてくれた機動隊の人に

質問した。

「ねえ？ ちょっといいかしら」

「どうした？」

「これ全部、私がやってしまったんです。『死んでしまえ』って念じたから。それでこの人達皆死んじゃったんだけど、これって罪になりますか？」

「はあ？ 君、何を言ってるんだい？ そんな馬鹿な事がある訳ないじゃないか」

「いや、本当です。私が神の力を使ったからこうなったんです。でも結果的に全然つまらなかったんです。むしろ私がつまらないと思っただけです。だから死にたくなっただけです。でも力が急に使えなくなっただけ……」

「ははは、君にはそんな力はないよ。むしろ被害者。だってこの殺戮は日本を脅かすテロリストの仕業だもの」

は？

「たまたま君のいる場所が風上になって、噴水の毒水が当たらなかっただけだよ。ちょうどついさっきね、『今日の6時、この噴水を通して毒水をばらまくぞ』って犯行予告があったんだ。テロリストから。君はたまたま運が良くって助かったんだよ。だから神の力なんて勘違い。ははは」

え？ 毒水？ テロリスト？ あー、そーいや死んだ人達は全員風下にいるな。なるほど、そーゆー事か。つまり、私には神の力なんてなくて、たまたま私が「死ね」って思ったのと、テロリストが仕組んだ毒噴水が被っただけかー、なーんだ。

つまんね。

てかなんでこの機動隊の人笑ってんだ。死ねよ。

「ったく。最近のテロリストはタチが悪い。とりあえず、一応君は救急車に乗って病院で検査してもらったほうがいい。万が一って場合もあるしな。それに頭が相当きてるみたいだし…」

「お前に言われたかねーよ。イカレ機動隊」って言ってやりたかったが、相手は国家の犬なので素直に「わかりました」と言った。

私はその人の部下に連れられ、救急車に向かった。あ、その前にイカレ機動隊に言うておかないと。

「ねえ、もしテロリスト捕まえたら言うてあげて。人が人を殺すのなんて、虚しいだけだよって。どうせそんな事やっても、世界なんて変わりはないよって。結局つまんないだけだよって」

「ん？ ああ、解ったよ。ちゃんと言うておく」

私は救急車に乗り込み、事件のあった現場を眺め眩く。

「ほんと、つまんねー世界」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9640k/>

神の力を持つ女

2011年10月6日10時49分発行